

## 芦屋市の蝶(その2)

### 西 隆 広

#### 1. はじめに

私は兵庫県芦屋市の蝶に関して1984年に報告した<sup>1)</sup>(以下「84年報告」という)。その後十数年を経て、芦屋市で見られる蝶は変化を見せている。そこで84年報告をベースに、その後2000年までの記録を一定の期間に区切り、期間ごとに記録の有無を示すことにより、芦屋市における蝶という昆虫の一群についての種別の消息を報告する。

用いた記録は一部を除いて、現在私が所有しているものである。記録の形態は、標本、野帳記載或いは生態写真である。標本、野帳記載については次の問題点を含んでいることをお断りする。

**標 本**：標本の一部は1995年1月の兵庫県南部地震による家屋被害で失われた。それらの中で記録を控えていなかった標

本のデータは失われた。

**野帳記載**：1992年の後半から、市内で下記の2ルートを決めて種別の頭数の記録を始めた。しかし、地震後の県外疎開期間である1995年、1996年の芦屋市内での記録は少ない。また1997年以降は、2ルートの内、簡単に観察できる第1ルートに偏っている。ルートでの観察は、ルート内を幾つかの区間に分けて、区間内で目撃した蝶の数を種別にカウントしている。ルートでの観察を開始する以前の目撃記録は少しあるが、断片的で連続性に欠け不十分である。なお地震後野帳類はすべて取り出すことができた。

#### 観察ルート

区 分	観察ルートの始終点及び経由地点
第1ルート	芦屋川業平橋(標高=17m)～城山(標高=260m)～高座滝(標高=200m)
第2ルート	東お多福山登山口(標高=450m)～蛇谷～(標高=480m～640m)～東お多福山(標高=696m)

注)「観察ルートの始終点及び経由地点」は基本であり、観察に当たっては、始終点の変更、区間の追加、削除を適宜行っている。

#### 2. 芦屋市の蝶の期間別記録

私が2000年までに芦屋市内で記録した79種の蝶の期間別記録の有無を示したものが巻末に示した「芦屋市の蝶：期間記録一覧表」である。84年報告より後の期間記録については1期間の区切りは原則として5年としたが、84年報告は1983年までの記録に基づいているため、始めの期間は1984年～1990年の7年間を1期間とした。

同表等に基づき以下に芦屋市の蝶の概観を述べる。

##### (1) 芦屋市の蝶の消長

「芦屋市の蝶：期間記録一覧表」及び同表を作成するために用いた私の全記録に基づき84年報告以降、新に記録されたもの、記録が途絶えているものなどをまとめたものが、「芦屋市の蝶の消長」である。「84年報告の後、新に見出された種」である5種の内、3種は近年分布の拡大が著しい当地にとってより南方起源の蝶である。私は進出して来る話題性の高い蝶よりも、姿を消しつつある地味な蝶を重視している。より大きな生態的環境問題が、そこにあると考

えるからである。その中で温帯系ヒョウモンチョウ類の減少傾向が気にかかっている<sup>2)</sup>。温帯系ヒョウモンチョウ類はメスグロヒョウモンを除く4種については1980年代前半の野帳の記述を見る限り珍しくなかったが、現在では1種を除いて著しく減少しているか、あるいは見られなくなっている。この現象に関しては、後述するルートを決めての種別頭数観察を開始した1992年後半時点では、すでに現在とあまり変わらなくなっており、何時頃から、どの様に観察数が減少していったかを確認できなかったことは残念である。

温帯系ヒョウモンチョウ類など一部の種の衰退の原因の一つには、植生が二次林である六甲山の場合は、その遷移が進行中であることが挙げられよう。戦後半世紀以上の間、麓から見ると六甲山は、植林事業などによって緑が確実に豊かになった。そして林床は暗くなっていった。その過程で栄養塩が蓄積されたためか、裸地などのブッシュ化が進んでいる。急峻な上に、表層が風化花崗岩起源のマサ土でなる不安定な六甲山の治山のためには重要であるこの遷

移は、一部の蝶などかなりの影響を与えているのではないかと思う。

その他、かつて所々にあった湿地は大規模な開発の影響で多くが消滅し、さらに地球温暖化の影響か、近年の小雨傾向で、残存湿地の乾燥化が進んでいる。芦屋市の場合、奥池南部のいもり谷に広がっていた

貴重な湿地群は、1960年代に行われた保養地のための宅地開発で多くが失われ、その結果であろう、ウラナミジャノメは絶滅した。現在僅かに残っている湿地には、ハッチョウトンボが今年(2001年)も見られたが、乾燥化による草原化が進んでおり、後暫くで姿を消すのではないかと危惧している。

芦屋市の蝶の消長(2000年までの記録による)

区 分	該 当 種
2000年から遡り20年以上記録がない種(絶滅)	ウラナミジャノメ
2000年から遡り10年以上記録がない種	エソスジグロシロチョウ、ウラキンシジミ <sup>注)</sup> 、ウラナミアカシジミ、クロシジミ、オオウラギンスジヒョウモン、ヒメヒカゲ、ミヤマチャバネセセリ
2000年から遡り5年以上記録がない種	メスグロヒョウモン、ウラギンヒョウモン、ヒメジャノメ
相当の期間において近年再記録された種	ツマグロキチョウ(9年)、アオバセセリ(15年)
84年報告の後、新たに見出された種	クロコノマチョウ、ウラゴマダラシジミ、イシガケチョウ、ミスジチョウ、ムラサキツバメ

注) 2001年に記録された。

## (2) 芦屋市で注目すべき蝶

「芦屋市の蝶：期間記録一覧表」の区分欄に●を付した種について略記する。

### ● ツマグロキチョウ *Eurema laeta*

1980年代前半は海岸線から山中まで広範囲にかなりの記録があったが、その後は殆どなく、1990年の目撃記録を最後に、記録が途絶えていた。

1999年秋に久しぶりに1♂の記録を得た。ところで本種の芦屋市における私の記録には夏型がなく、すべて秋型である。なお1984年に越冬個体の記録が1例ある。

### ● エソスジグロシロチョウ *Pieris napi*

84年報告以外にない。その標本は震災で失われた。芦屋市では同属のスジグロシロチョウ(*P. melete*)も決して多くはない。本種は何時も注意しているが、出会えない。

### ● ムラサキツバメ *Narathura bazalus*

1999年に記録したのが最初であるが、2000年は確認できなかった。本市での発生は古市景一氏の連絡により知った。古市景一氏より報告がある予定である。

### ● ウラゴマダラシジミ *Artopetes pryeri*

1992年の初記録<sup>2)</sup>の他に、2001年までの間に4例の記録がある。細々と生き続けているようである。なお、最初の標本は震災で失われた。

### ● ウラキンシジミ *Ussuriana stygiana*

1991年～2000年の記録がないが、この原因の一つにルートでの観察に力を入れていたために、本種

の主な発生地である高座川上流域を見回らなかったことが挙げられる。ただ、2000年に本種の記録を求めて発生地に入ってみたが、出会わなかった。そこで明らかな減少傾向が見られると考えていたところ、2001年は第1ルート内で3頭記録した。内1頭(♀)は、クリの花を訪れていた。

### ● ウラナミアカシジミ *Japonica saepestriata*

84年報告の記録を最後に、以後全く記録していない。

### ● オオミドリシジミ *Favonius orientalis*

かつては第1ルートの城山周辺では、少ないながらも毎年見られた。城山ではその後断続的に記録があったが、1993年の記録が現在までの最後の記録となっている。第2ルート内の東お多福山では、時折観察される程度だが、2000年には数頭の♂による追飛が観察された。

### ● クロシジミ *Niphanda fusca*

1980年のいもり谷での標本が現存している他、1984年の目撃記録があるが、その後の記録がない。注意しているが、最近は全く見られない。84年報告の標本は震災で失われた。

### ● ウラギンスジヒョウモン *Argyronome laodice*

温帯系ヒョウモンでは、本種のみが現在まで連続的に見られ、第2ルート内の東お多福山では個体数は少なくない。しかし今後他の温帯系ヒョウモンと同様に姿を消す可能性があり、現在注意深く見守っている。

### ● オオウラギンスジヒョウモン *Argyronome rus-*

*lana*

1983年を最後に記録が途絶えている。石宝殿(芦屋市と西宮市の境界上にあり標高860m)付近など、ルート観察地域外に残存している可能性がある。

● メスグロヒョウモン *Damora sugana*

84年報告の他には、1987年及び1994年の記録がある。1994年は複数回観察されたが<sup>2.)</sup>、昔から極めて散発的にしか観察できない種である。

● ミドリヒョウモン *Argynnis paphia*

各期間の記録としては連続しているが最近は著しく少なくなり、記録のない年が多くなっている上に、最近の5年間は記録がある年でも秋季のみの記録となっている。2000年秋には、芦屋市の南部住宅地で越冬個体を確認した。

● ウラギンヒョウモン *Fabriciana adippe*

1991年の標本(東お多福山、金武克巳採集・保管)を確認している他、1993年の目撃記録があるが、最近は全く見かけなくなった。石宝殿付近など、ルート観察地域外に残存している可能性がある。

● ミスジチョウ *Neptis philyra*

1999年の1♀が私が有する市内唯一の記録である。2001年には本種の雄らしい個体を目撃したが、確認に至らなかった。見逃しがあると考えられる。

なお、上記記録は未報告であるので、ここでデータを添えて報告する。

データ 1♀ 12.VI.1999 芦屋川中流(奥山)

芦屋市 西 陸広 採集・保管

● サカハチチョウ *Araschnia burejana*

六甲山では少ない種であるが、僅かながらも増えつつあるようだ。著名な鳥の研究家で昆虫にも造詣が深かった故小林桂助氏は「昔は、六甲山にはいなかった」と語っていた。

● スミナガシ *Dichorragia nesimachus*

84年報告の他に、1994年の記録がある。また、芦屋市に隣接する神戸市東灘区東部の芦屋川流域内で、1985年に記録している。少ない種である。

なお、84年報告時点では本種の市内の標本がなかったため、データの無い報告となっている。1994年の記録を報告しておく。

データ 1♀ 21.VIII.1994 蛇谷

芦屋市 西 陸広 採集・保管

● イシガケチョウ *Cyrestis thyodamas*

1992年に確認<sup>2.)</sup>して以来、毎年ではないが記録している。2001年も記録した。

● ウラナミジャノメ *Ypthima multistriata*

84年報告のとおりである。芦屋市では絶滅種である。

● ヒメヒカゲ *Coenonympha oedippus*

現存の記録では1984の写真記録が最後になっている。その後も暫く見られ、知人より写真撮影の報告を受けたがデータは残っていない。現在は全く見られない。芦屋市では生息に適した環境は少ないが、

そこで長期間記録が途絶えていることから、絶滅した可能性が高い。

● ヒメジャノメ *Mycalesis gotama*

観察に力を入れている2ルート内に本種の生息適地がないことから、確認が難しくなっており、1996年～2000年の記録がない。本市では山麓部での宅地開発の結果、田園的な環境が少なくなっており本種は局地的に見られる程度であるが、本来の生息環境ではない森林で鬱閉された谷での記録もある。

● クロコノマチョウ *Melanitis phedima*

1985年に確認<sup>3.)</sup>して以来、ほぼ毎年見られるが、多いものではない。夏季よりも秋季の記録が多いが、越冬個体の記録もある<sup>(2.)</sup>の報告の後確認。

● アオバセセリ *Chaospes benjaminii*

1970年代までは、城山の山頂では、雄がテリトリーを争う光景が見られた。その後、84年報告(1983年の目撃記録)を最後に、私の記録からは見られなくなっていた。1998年5月、高座川においてウツギの花にきた1♀を久し振りに採集した。少なくなった蝶の一つである。

● ミヤマチャバネセセリ *Pelopidas jansonis*

1981年～1983年の標本が残っている他1984年の目撃記録があるが、その後途絶えている。観察時には何時も注意しているが、再発見には至っていない。

## 3. ルートを定めての観察の功罪

この報告では、1992年後半から始めた2ルートでの観察記録が大いに役立った。しかし、ルートを定めての観察を行うことは、個人の感覚では功罪相半ばする、という気持ちになる。このことについて少し述べておきたい。

ルートを定めての観察の悩みは、週末にしか時間が自由にならない今の私にとって、時間確保が困難になることである。また、できるだけ間隔を開けずに観察しようとする結果、時には精神的な負担を感じることもある。特に猛暑の季節は、蝶の姿は明らかに少なくなるが、それでも、観察を行わなければならないとして、時々さぼりつつも、出かけることになる。結構疲れる。また、この観察に力を入れますと、ルート外で主に見られる種の記録が欠落し、結果としてある種の異変に気づかずに過ごすことになりかねない。

一方、ルートを定めての観察は、回数を重ねる中で様々なものが見えてくる。この観察を開始した第一の目的はそこにある。今回の報告は原則として84年報告とそれ以降の、記録の有無までとしたが、季節ごとの種別、区間別の頭数記録を今後分析する中で、面白いものが見えてくるのではないかと期待している。これについては、2001年にアカシジミヤテングチョウの多発に遭遇したが、両種ともにルート内に発生地があったために、過去の目撃個体数との比較が可能となった。種別に様々な変動を見せる

中で、その背景即ち環境の変化の状況まで類推できれば、と思っている。

#### 4. あとがき

芦屋市では84年報告以降、現在まで連続的に見られる蝶の中にも、同報告での解説とは異なった状態になっているものがある。本来ならば全種に対して解説できればよいのだが、そのためにはルート外の近年の観察記録が極めて不十分な状態である。今後何年かかけて観察した後、改めて報告したい。

#### 謝 辞

今回の報告に当たっては、古市景一氏にはムラサキツバメの情報を頂戴するなど御世話になりました。また金武克巳氏には芦屋市でのウラギンヒョウ

モンの記録を提供していただきました。末筆ではありますが、お二人に深甚の謝意を表します。なお、金武氏の標本は、兵庫県南部地震で甚大な被害に遭われたお宅からかろうじて取り出された貴重なものであることを、ここにご報告致します。

#### <参考文献>

1. 西 隆広(1984) 芦屋市の蝶 てんとうむしNo.9: 28-38
2. 西 隆広(1994) 六甲山城の蝶数種について きべりはむし第22巻第2号
3. 西 隆広(1988) 芦屋市内におけるクロコノマチョウの記録 きべりはむし第16巻第1号

(NISHI TAKAHIRO 芦屋市川西町4-3)

### 芦屋市の蝶：期間記録一覧表

84年報告及び各期間で○を記入した種は、記録があることを示す。

区分	和 名	学 名	84年 報告	期 間		
				1984~ 1990	1991~ 1995	1996~ 2000
	ジャコウアゲハ	<i>Byasa alcinous</i>	○	○	○	○
	アオスジアゲハ	<i>Graphium sarpedon</i>	○	○	○	○
	ナミアゲハ	<i>Papilio xuthus</i>	○	○	○	○
	キアゲハ	<i>Papilio machaon</i>	○	○	○	○
	モンキアゲハ	<i>Papilio helenus</i>	○	○	○	○
	クロアゲハ	<i>Papilio protenor</i>	○	○	○	○
	オナガアゲハ	<i>Papilio macilentus</i>	○	○	○	○
	ナガサキアゲハ	<i>Papilio memnon</i>	○	○	○	○
	カラスアゲハ	<i>Papilio dehaanii</i>	○	○	○	○
	ミヤマカラスアゲハ	<i>Papilio maackii</i>	○	○	○	○
	キチョウ	<i>Eurema hecabe</i>	○	○	○	○
●	ツマグロキチョウ	<i>Eurema laeta</i>	○	○		○
	モンキチョウ	<i>Colias erate</i>	○	○	○	○
	スジグロシロチョウ	<i>Pieris melete</i>	○	○	○	○
●	エゾスジグロシロチョウ	<i>Pieris napi</i>	○			
	モンシロチョウ	<i>Pieris rapae</i>	○	○	○	○
	ツマキチョウ	<i>Anthocharis scolymus</i>	○	○	○	○
	ムラサキシジミ	<i>Narathura japonica</i>	○	○	○	○
●	ムラサキツバメ	<i>Narathura bazalus</i>				○
●	ウラゴマダラシジミ	<i>Artopotes pryri</i>			○	○
●	ウラキンシジミ	<i>Ussuriana stygiana</i>	○	○		
	アカシジミ	<i>Japonica lutea</i>	○	○	○	○
●	ウラナミアカシジミ	<i>Japonica saepestriata</i>	○			
	ウラミスジシジミ	<i>Wagimo signatus</i>	○	○	○	○
	ミズイロオナガシジミ	<i>Antigius attilia</i>	○	○	○	○
●	オオミドリシジミ	<i>Favonius orientalis</i>	○		○	○
	コツバメ	<i>Callophrys ferrea</i>	○	○	○	○
	トラフシジミ	<i>Rapala arata</i>	○	○	○	○
	ベニシジミ	<i>Lycaena phlaeas</i>	○	○	○	○
●	クロシジミ	<i>Niphanda fusca</i>	○			
	ウラナミシジミ	<i>Lampides boeticus</i>	○	○	○	○

区分	和名	学名	84年 報告	期 間		
				1984~ 1990	1991~ 1995	1996~ 2000
	ヤマトシジミ	<i>Zizeeria maha</i>	○	○	○	○
	ルリシジミ	<i>Celastrina argiolus</i>	○	○	○	○
	ツバメシジミ	<i>Everes argiades</i>	○	○	○	○
	ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta</i>	○	○	○	○
	テングチョウ	<i>Libythea celtis</i>	○	○	○	○
	アサギマダラ	<i>Parantica sita</i>	○	○	○	○
●	ウラギンスジヒョウモン	<i>Argyronome laodice</i>	○	○	○	○
●	オオウラギンスジヒョウモン	<i>Argyronome rulsana</i>	○			
●	メスグロヒョウモン	<i>Damora sagana</i>	○		○	
●	ミドリヒョウモン	<i>Argynnis paphia</i>	○	○	○	○
●	ウラギンヒョウモン	<i>Fabriciana adippe</i>	○	○	○	
	ツマグロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius</i>	○	○	○	○
	イチモンジチョウ	<i>Ladoga camilla</i>	○	○	○	○
	アサマイチモンジ	<i>Ladoga glorifica</i>	○	○	○	○
	コムミスジ	<i>Neptis sappho</i>	○	○	○	○
	ホシミスジ	<i>Neptis pryri</i>	○	○	○	○
●	ミスジチョウ	<i>Neptis philyra</i>				○
●	サカハチチョウ	<i>Araschnia burejana</i>	○		○	○
	キタテハ	<i>Polygonia c-aureum</i>	○	○	○	○
	ヒオドシチョウ	<i>Nymphalis xanthomelas</i>	○	○	○	○
	ルリタテハ	<i>Kaniska canace</i>	○	○	○	○
	アカタテハ	<i>Vanessa indica</i>	○	○	○	○
	ヒメアカタテハ	<i>Cynthia cardui</i>	○	○	○	○
●	スミナガシ	<i>Dichorragia nesimachus</i>	○		○	
●	イシガケチョウ	<i>Cyrestis thyodamas</i>			○	○
	コムラサキ	<i>Apatura metis</i>	○	○	○	○
	ゴマダラチョウ	<i>Hestina japonica</i>	○	○	○	○
	ヒメウラナミジャノメ	<i>Ypthima argus</i>	○	○	○	○
●	ウラナミジャノメ	<i>Ypthima multistriata</i>	○			
●	ヒメヒカゲ	<i>Coenonympha oedippus</i>	○	○		
	ジャノメチョウ	<i>Minois dryas</i>	○	○	○	○
	ヒカゲチョウ	<i>Lethe sicelis</i>	○	○	○	○
	クロヒカゲ	<i>Lethe diana</i>	○	○	○	○
	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitschii</i>	○	○	○	○
●	ヒメジャノメ	<i>Mycalesis gotama</i>	○	○	○	
	コジャノメ	<i>Mycalesis francisca</i>	○	○	○	○
●	クロコノマチョウ	<i>Melanitis phedima</i>		○	○	○
	ミヤマセセリ	<i>Erynnis montanus</i>	○	○	○	○
	ダイミョウセセリ	<i>Daimio tethys</i>	○	○	○	○
●	アオバセセリ	<i>Choaspes benjamintii</i>	○			○
	コチャバネセセリ	<i>Thoressa varia</i>	○	○	○	○
	ホソバセセリ	<i>Isoteinon lamprospilus</i>	○	○	○	○
	ヒメキマダラセセリ	<i>Ochlodes ochraceus</i>	○	○	○	○
	キマダラセセリ	<i>Potanthus flavus</i>	○	○	○	○
	オオチャバネセセリ	<i>Polytremsis pellucida</i>	○	○	○	○
●	ミヤマチャバネセセリ	<i>Pelopidas jansonis</i>	○	○		
	チャバネセセリ	<i>Pelopidas mathias</i>	○	○	○	○
	イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata</i>	○	○	○	○

注) 区分の●: 「芦屋市で注目すべき蝶」としてコメントしたもの